

Rachel Murphy,

# *How Migrant Labor Is Changing Rural China.*

Cambridge: Cambridge University Press,  
2002, xx + 286pp.

やま ぐち ま み  
山 口 真 美

## はじめに

中国では、出稼ぎ労働者<sup>(注1)</sup>の都市における就業環境はますます厳しいものになっている。「世界の工場」といわれるようになった珠江デルタには、「安くて無尽蔵」の労働力を求めて世界中の企業が進出している。企業が享受する有利な雇用条件は、そこで働く労働者にとってはそのまま、厳しい労働環境であることを意味する。製造業と並んで出稼ぎ労働者の就業の多い建設現場でも、低賃金と賃金の遅配、未払いの例に事欠かない。よりインフォーマルな自営的業種でも、新規参入は難しいのが現状である。

しかしそれにもかかわらず、都市に滞在する地方出身者は増え続け、また都市への定住化が進んでいる。都市の側から見ると、地方出身者は今日、故郷との距離をますます広げているように見える。

都市の労働市場による雇用吸収の見通しが厳しくなったのに伴い、1990年代半ば以降、「出稼ぎ経験者による帰郷起業」(returned migrants entrepreneurship)は中国農村をめぐる関心事のひとつとなっている。中でも、農業部農村経済研究センターによる実証研究<sup>(注2)</sup>が代表的である。その結論としては、近年、失業等により都市労働市場から押し出される形で帰郷する農村出身労働者は増えているものの、帰郷して起業する例は帰郷者の2.5%に過ぎず、多くは帰郷後やむを得ず再び農業に就く者であるという、帰郷起業に悲観的なものである。

『出稼ぎ労働者はどう中国農村を変えているのか』

と題する本書は、ケンブリッジ大学に籍を置き、開発学を専門とする著者による、独自の農家調査とインタビュー調査をもとにした定性的な実証研究である。本書は出身地農村の側から見た出稼ぎのインパクトを描こうとする。以下ではまず、各章の内容を簡単に紹介し、次に本書の特徴と貢献を整理したうえで、若干の問題点を提起したい。

## 本書の構成

本書は序章以下9章から構成されている。全体の流れとしては、序章～第2章で議論の前提を整理し、主題に入る。第3章～第4章では出稼ぎによる農村内の変化を考察し、第5章～第7章では帰郷起業の成功者たちをめぐるミクロ分析を行う。第8章では反対に起業に至らなかった帰郷者の事例を紹介する。第9章は本書の結論である。

### 序 章

第1章 価値観、目標、資源

第2章 中国、江西、調査県

第3章 資源再配分と不平等

第4章 出稼ぎ、仕送り、目標

第5章 企業創設と地方都市建設のための帰郷者リクルート

第6章 企業と起業家

第7章 起業家、社会経済的变化、政府との相互作用

第8章 重い気持ちと空のポケットでの帰郷

第9章 結論

序章では本書の背景となる著者の問題提起がなされる。著者は、中国の労働力移動において、出稼ぎの流出、仕送り、帰郷による農村地域へのインパクトにこれまでほとんど関心が払われてこなかったことを指摘する。

フィールドワークは断続的にのべ17カ月にわたって江西省の丘陵地帯に位置する3つの県において行われた。調査地のひとつは江西省西部の万載県(Wanzai)で、1990年代半ばから出稼ぎ労働者を出すようになったばかりの地域である。残る2つの調

査地、信豊県（Xinfeng）、于都県（Yudu）は出稼ぎ送り出し歴が比較的長く、とりわけ帰郷起業が盛んなことで全国的にも知られる地域であるとする。この2県では帰郷後起業した出稼ぎ出身者へのインタビュー調査が行われている。

第1章では著者が労働力移動研究における二大視角であるとする近代化論と構造主義論を検討したうえで、本書における著者独自のフレームワークが提示される。著者は、近代化論、構造主義論がどちらも、中心と周縁、都市と農村、近代と伝統という単純な二元論で移動過程をとらえ、両者の中間領域にある出稼ぎ労働者の存在を正確に分析できないデメリットを指摘する。

これに対し著者は、出稼ぎと帰郷は個人の目標実現のための戦略であることに着目し、「価値観」（values）、「目標」（goals）、「資源」（resources）という3つの主観的なファクターに焦点を置くことで、本書を通して個人的な変数を重視した労働力移動の議論を展開しようとする。

第2章では本書の調査地である江西省の3つの県を紹介する。調査地は建国前から、全国市場に直結した市場ネットワークの発達した土地で、自営業の伝統が根付いていた。これに加え外地から移入してきた客家が江西省に紡織、製紙、花火などの伝統技術をもたらしたため、家内工業で生産した製品を外地に売りに行く行商や、職人として外地に出る自営業の伝統があることを紹介する。

以下第3章、第4章は、万載県における138戸の農家調査に基づく分析である。

第3章では出稼ぎが村内の不平等にどう影響するかを考察する。著者は出稼ぎ労働が多くの村民に開かれた貴重な非農業就業機会であることを積極的に評価する。なぜなら、地元での非農業就業は非常に少なく、就業することができるのは地元の政治的コネクションを持つ者と家に伝わる伝統技術を持つ者に限られるからである。それに対し、村外へ出稼ぎは労働力さえ持っていれば、どの農家でも参加できる非農業就業であるとする。結局、出稼ぎによる農家間での不平等を決めるのは、農家の供出できる労働力数の違いであり、村内での不平等はその意味

で各農家の家族周期（development cycle of household）によって決まるものだ」と著者は主張する。

第4章では、出稼ぎによる収入や仕送りが発生することによって、人々の目標にどのような変化が現れるかを論じるために、教育、マイホーム建設、結婚という代表的な3つの支出項目が紹介される。教育支出は、出稼ぎ動向と密接に相関している。出稼ぎは教育に支出できる資源を増大させるが、就学率は出稼ぎ動向を受けて上下に変化する。教育支出の分野では、家計の価値観が出稼ぎ動向に左右されて変化しつつあることが指摘される。一方、マイホーム建設と結婚は農村の伝統的な支出分野である。出稼ぎにより、人々は快適な家建て、立派な結婚式を挙げるができるようになった。つまり、出稼ぎはこの2つの伝統的な支出分野に関しては、農村の人々の目標と価値基準を引き上げ、目標達成のために必要な資源とコストの総量をも引き上げる方向に作用したと著者は主張する。またこれは同時に、村内の出稼ぎに出られない人々に大きな負担を強いることにもなっていると指摘する。しかし、農村における出稼ぎは、仕送りによって人生の目標を達成できる人の数を絶対的に増やすものであり、そのインパクトは総じてポジティブなものであると著者は評価する。

第5章から第7章は、帰郷起業の成功例をめぐって、主に信豊県と于都県における帰郷起業家へのインタビュー調査をもとにした議論である。

第5章ではまず帰郷起業の政治的環境を論じている。著者は、地元政府をひとつの社会的アクターと見なし、自らのインセンティブに従って帰郷起業を支持していると説明する。なお、本書における地元政府とは郷鎮政府とその組織下の行政村を指す。著者はまず、1990年代半ばから中央政府が出稼ぎ帰郷者による出身地での起業を奨励していることを紹介する。一方、地元政府は自らの財政収入を増やすため、管轄下での企業創設に積極的である。こうした環境の下、折しも1995年以降出稼ぎからの帰郷者が増えた信豊、于都の2県では、帰郷者の起業に対して地元政府が様々な優遇措置をとっており、帰郷起業家にとっての事業環境は比較的恵まれていること

を指摘する。

第6章では帰郷者の中のいわば「勝ち組」である帰郷起業家を紹介する。帰郷者による起業は、ほとんどが出稼ぎ時に習得した技術をもとに、出稼ぎ就業中に経験した業種において実現され、製造業とサービス業が多い。帰郷起業家による企業は、従業員を雇用する場合には同業種での出稼ぎ経験を持つ者を採用していることや、帰郷起業家が都市で蓄積した資金や技術が故郷で使われるとき、本人の社会的地位を上げる効果を持つことが指摘される。

第7章では前章で見た帰郷者による起業が出身地の経済にどのような変化をもたらしているかを議論する。出稼ぎ帰郷者の出身地における起業は、地元政府と帰郷者の利害がぶつかる場でもある。信豊、于都の地元政府は、投資、雇用、市場開拓などの面で帰郷起業家が持つ資源を地域の発展戦略に利用しようとしている。一方、起業家は自らのビジネスのための経営許可、土地利用、融資や納税面での優遇など、事業環境の改善のために常に地元幹部と交渉を重ねている。こうした帰郷起業家と地元政府との相互作用の結果が、出身地農村における経営環境の改善、熟練労働市場の形成、地元国有企業経営者の起用、地元市場の全国市場への統合などの面で出身地農村の経済環境を向上させる方向に作用していることが指摘される。

第8章では出稼ぎ「勝ち組」に対するいわば「負け組」を紹介することで著者は出稼ぎの影響にバランス良く目配りしようとする。このグループの帰郷の4大要因は、失業、病気とけが、妊娠と育児、結婚と家庭内の事情である。ここで問題とされるのは、こうした帰郷者たちが出稼ぎ生活の中で都市の生活や文化、価値観に順応しており、出身地農村への再適応ができなくなっていることである。このことは、出身地農村の社会的安定にとっても大きな問題となっていることが指摘される。

第9章は本書の結論である。著者は、出稼ぎに関するマクロ分析が看過してしまう個々の人々へのミクロな視点こそが、出稼ぎとそれによる変化を議論する際の中心であるべきだと主張する。本書の議論はこうしたミクロ分析を中心に展開され、受け身の

個人ではなく、自らの価値観と資源を使って目標に向かって戦略的に行動する社会的アクターとしての農民と、それに影響されて変化する国家の姿を描き出すことができた、として締め括られている。

### 本書の特徴と貢献

まず、第1に本書は労働移動研究でありながら、出身地農村の変化を正面から扱おうとしている点でユニークである。中国の地域間労働力移動を扱う研究の蓄積は多いが、農村の変化を中心に論じる研究<sup>(注3)</sup>は少ない。なぜ農村が扱われにくかったのか。それは著者も指摘するとおり、近代化論的あるいは構造主義論的視点のあり方に関わることであろう。これらの世界観は「都市と農村を明確に分断して、一度農村を離れた農民を、都市中心近代変数に反応する、受動的な存在ととらえる」(p.6)。そこでは農村と農民の間での相互作用は想定されない。しかしながら、本書でも指摘されるように中国の地域間労働力移動の多くは一時的な出稼ぎである。都市での就業が不安定であるため、「故郷の家族や友人が常に出稼ぎのリスクをサポートし、同時に出稼ぎ労働者を故郷につなぎ止める役割をする」(p.10)。出身地農村とのつながりが強いのは、都市への定着がかなり進んだ出稼ぎ家族でも同様である。中国の労働移動研究においては、より多くの関心が農村部に向けられて然るべきであると評者は考える。

なお、農村の変化をとらえる際のアクターとして、本書は複数の多様な主体に注目している。すなわち、出稼ぎ農民全体(第3章、第4章)、出身地の地元政府(第5章)、帰郷起業家(第6章、第7章)、出稼ぎをやめて帰郷せざるを得なかった者たち(第8章)である。特に農村を出稼ぎ農民と帰郷起業家の独壇場とせず、地元政府をひとつの社会的アクターと見なした分析<sup>(注4)</sup>は出稼ぎ研究の中では目新しく、興味深い。出稼ぎ者の仕送りや帰郷起業家をいかに地方の経済発展と自らの昇進のために利用しようかと思惑をめぐらす地元政府と幹部の姿が描かれる。出稼ぎで力をつけた帰郷起業家と地元政府の「相互作用」(第7章)までを視野に入れることで、総数

としてはまだ少ない帰郷起業が農村を変えつつあるとの著者の主張が説得力を増すものとなっている。

第2の特徴は農民が出稼ぎを通じてエンパワーされる軌跡を明らかにしている点にあるだろう。これは、本書がミクロなアプローチを採用したことで可能になっている。著者が指摘するように、出身地農村における「条件の良い非農業就業は、地元の政治的コンタクトを持つ農家と伝統の家業を持つ農家の者に限られている」(p.68)。そこで、地元資源を持たない者にも開かれた非農業就業機会としての出稼ぎが重要な意味を持つと著者は主張する。では、農民が帰郷後、非農業就業に就くことを可能にするのは何だろうか。言い換えれば、農民は出稼ぎを通して何を獲得するのだろうか。著者は、それは農民が出稼ぎ先で得た技術、情報、ネットワークなどの資源自体(p.147)と、そうした資源を持つことで、地元政府に対して持つことになる「交渉力」(p.181)であるとする。帰郷起業家は出稼ぎで得た資源を元手に、地元幹部への交渉を通してビジネスに必要な地元資源を獲得し、起業する。農民が出稼ぎを通して力をつけ、帰郷して起業するまでの過程を、本書が3県における調査を組み合わせることで明らかにした貢献は評価される。

第3は帰郷起業家についてミクロなアプローチによる定性的な分析を試みていることである。出稼ぎ帰郷者による起業については一般に懐疑的な評価が多い。しかし、少数であるから重要でないとは限らない。起業に成功した帰郷者はどのような属性の者で、どのような条件を持ち起業に至ったのか、反対に、起業できなかった帰郷者には何が不足しているのかを質的に明らかにすることは重要な作業である。

出稼ぎ帰郷者による起業に関する研究蓄積<sup>(注5)</sup>の中でも、帰郷起業の可能性の評価には大きな乖離がある。これは主に、調査地の選定によるものと考えられる。帰郷起業の可能性には、帰郷者個人に関わる変数の他に、地元の政治・経済的環境が大きく影響するからである。本書は地元政府が帰郷起業家支持に積極的な地域における調査であり、環境変数を一定と見なしたうえで個人の変数に焦点を合わせることに成功している。本書は帰郷起業の盛んな地域

の事例として帰郷起業研究に貢献できるものである。

## 本書の問題点とまとめ

最後に本書の問題点を指摘しまとめとしたい。

第1に、中国の労働力移動研究、あるいは帰郷起業研究の中での本書の位置づけが読者にはとらえにくい点が挙げられる。本書は労働力移動による出身地農村の変化を主題とし、中国全体の中でも労働力流出が多い江西省の、とりわけ帰郷起業家の多い地域を調査地として行われた定性的な実証研究である。定性的な研究を行ううえでは、客観的なデータを利用することで扱おうとする事例の全体における位置づけを把握することが理想的であるが、本書においてはそれが十分にされていない。途上国一般における労働力移動研究に広く目盛りし、国際的な文脈の中で中国の農村労働力移動の特徴を位置づける点で本書は秀逸であるが、中国の文脈の中での調査地の位置づけに関しては、既往研究の整理を含めた紹介が不十分な印象を受ける。

また、調査地の選択にも若干の不満が残る。3県の調査地のうち、信豊、于都の2県は出稼ぎ送り出し歴が長く、帰郷起業事例が多い地域として選ばれている。2県における帰郷起業家インタビューから、帰郷者による企業の業種と規模が整理され(p.146)、そのほとんどが出稼ぎ先で学んだ業種であることが指摘されるが、信豊と于都の2県の帰郷起業家像は共通している。つまり、出稼ぎ先で工場労働者として働き、帰郷後その「イミテーションビジネス」(p.147)で起業するというものである。周知のように、中国の出稼ぎ労働者が就労する業種としては、建築業、サービス業なども工業と並んで多数を占める[白・宋 2002, 23]。本書からは、異なるタイプの出稼ぎ労働者にとっての帰郷起業の可能性は明らかにされない点が惜しまれる。

以上より、本書の調査地における社会変化を、中国全体の農村に応用することには十分慎重でなければならないだろう。しかしながら、今後多くの研究者によってこうした研究が積み重ねられることで、この問題点は解決されていくものである。

第2の問題点は著者の楽観的な都市労働市場観にある。著者は、工業化の遅れた農村において非農業就業機会が稀少であるのに対し、都市労働市場への参入は容易であることを強調する。出稼ぎ労働者は、「チェーンマイグレーションによって参入障壁の低い職業に就業する」(p.69)ため、「参入コストは、交通費、許可に関わる費用、都市生活の初期支出」(p.69)だけであるとする。しかし、チェーンマイグレーションによって参入できる職種は、一般的に特種の技術を必要としない単純労働だと考えられる。一方で著者は、本書の調査における帰郷起業の成功者の特徴として「長い都市経験、帰郷時年齢の高さ、都市の工場におけるホワイトカラー職種就業経験と高賃金、高学歴と技術を持つ者」(p.154)としている。こうした属性は、一般的な出稼ぎ労働者像からは大きく乖離したものである。成功した帰郷起業家層の職歴は出稼ぎを通してどのように形成されているのか。興味深い点であるが、本書においてはこれに関して何らの言及もない点は非常に残念である。

以上の問題点は、著者と同様に中国の出稼ぎ労働者をテーマとして制約の多い調査資料を扱う評者が、自戒もこめて提起したものである。学際的なアプローチを得意とする開発学の視角から書かれた中国研究の書として本書は示唆に富んでいる。中国農村を扱った数々の定量的な研究と並んで、多様な社会的アクターを分析の対象とした本書のような定性的な実証研究が、今後より広い読者の関心を呼び、多面的な中国農村研究が展開されることを期待したい。

(注1) 本稿中では、英文のmigrationの語を「労働力移動」、または「出稼ぎ」と訳す。これは、本書が扱う移動が基本的に、短期の労働移動であることが前提とされているからである。

(注2) 「中国農村労働力回流研究」課題組と称するこのプロジェクトの報告書は、白・宋(2002)にまとめられている。なお、このプロジェクトのデータは代表的な出稼ぎ送り出し地域である四川省、安徽省の4県、12村の農家305戸の家計調査と帰郷起業家39人へのインタビュー調査に基づいている。

(注3) 評者の知る限りでは、Sato(2003)は数少ない、現代中国農村の農民と出稼ぎ、農民起業家を中心的に取り上げた研究である。なお、都市の側から出稼ぎ労働者の問題に取り組んだ研究としては、Solinger(1999)等がある。

(注4) 中国農村一般に関しては、Oi(1989)に代表される地方基層政府と幹部を扱った研究の蓄積がある。

(注5) 庾・王(1999)の安徽省阜陽市の2県10行政村の5郷鎮と帰郷者70名に対する調査によれば、帰郷者に占める起業率は18.5%である。なお、前述の「中国農村労働力回流研究」課題組の調査では帰郷起業家は帰郷者全体の中で2.5%に過ぎない[白・宋 2002, 41]

## 文献リスト

### <中国語文献>

白南生・宋洪遠 2002.『回郷，還是進城？ 中国農村外出労働力回流研究』北京 中国財政経済出版社.

庾徳昌・王化信 1999.『外出農民回郷創業的理論与实践』北京 中国農業出版社.

### <英語文献>

Oi, Jean C. 1989. *State and Peasant in Contemporary China: The Political Economy of Village Government*. Berkely: University of California Press.

Sato, Hiroshi. 2003. *The Growth of Market Relations in Post-reform Rural China: A Micro-analysis of Peasants, Migrants and Peasant Entrepreneurs*. London: RoutledgeCurzon.

Solinger, J. Dorothy. 1999. *Contesting Citizenship in Urban China: Peasant Migrants, the State, and the Logic of the Market*. Berkeley: University of California Press.

(アジア経済研究所研究交流課)